



天満宮参詣風景(昭和3年・千二十五年祭)「てんま-風土記大阪-」より(※)

天満のまちなみづくりに向けて

歴史深いまち、天満

天満は、難波津(なにわづ)といわれた古代より人が住み、天暦3年(949年)に大阪天満宮が現在地に鎮座、その後豊臣秀吉が天満宮の東に置いた天満本願寺の寺内町として、開発され、江戸時代には大坂三郷のひとつ、天満組と呼ばれていた歴史あるまちです。

大阪天満宮は、創建当時から天神祭など季節ごとに祭りを行い、現代に受け継いでいます。また、江戸時代には落語や人形浄瑠璃の小屋などが立ち並び大坂有数の遊興地となり、多くの人がこの地を訪れました。

旧淀川である大川沿いには、江戸時代から天満青物市場をはじめとする各種市場が立地し、乾物問屋・酒造業・ガラス製造業など同業種の集積もみられ、舟運を活かした商いの場として栄えました。今でも菅原町には乾物問屋の集積がみられ、その面影を伝えています。



天神祭り夕景 浪花百景より(※) 天満市場 浪花百景より(※)

まちなみの特徴

●まちなみを変化させる「祭り」、そして「しつらい」

天満では、天神祭をはじめ、えびす祭り、梅まつり、そして秋大祭の流鏝馬(やぶさめ)・神事など、四季折々の祭りが行われ、祭りの「しつらい」として提灯(ちようちん)や幔幕(まんまく)、笹などを飾り付ける昔ながらの風景が見られます。特に天神祭の際には、陸渡御(りくときよ)、船渡御(ふなときよ)が壮大に行われ、まちなみが華やかに変化します。



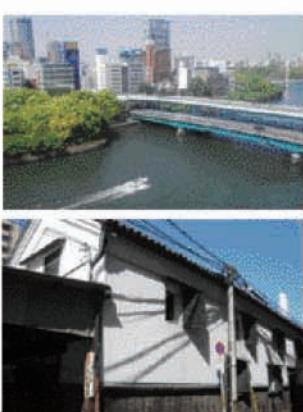
●門や塀、大木などが象徴的な社寺

天満には大阪天満宮、天満別院などの社寺が点在し、象徴的な門や塀、大木などがまちなみのポイントになっています。滝川公園は、かつてこの場所にあった興正寺(こうしょうじ)の石垣を受け継ぎ、往時の姿を今に伝えています。



●緑豊かな大川と川沿い特有の地形・建物

かつて天満青物市場としてにぎわった水辺は、現在は緑豊かな公園になっています。大川とかつての天満堀川沿いには、浜へ下りるための雁木(がんぎや川)に面して建てられた浜蔵などが残り、川との深い関わりを物語るっています。



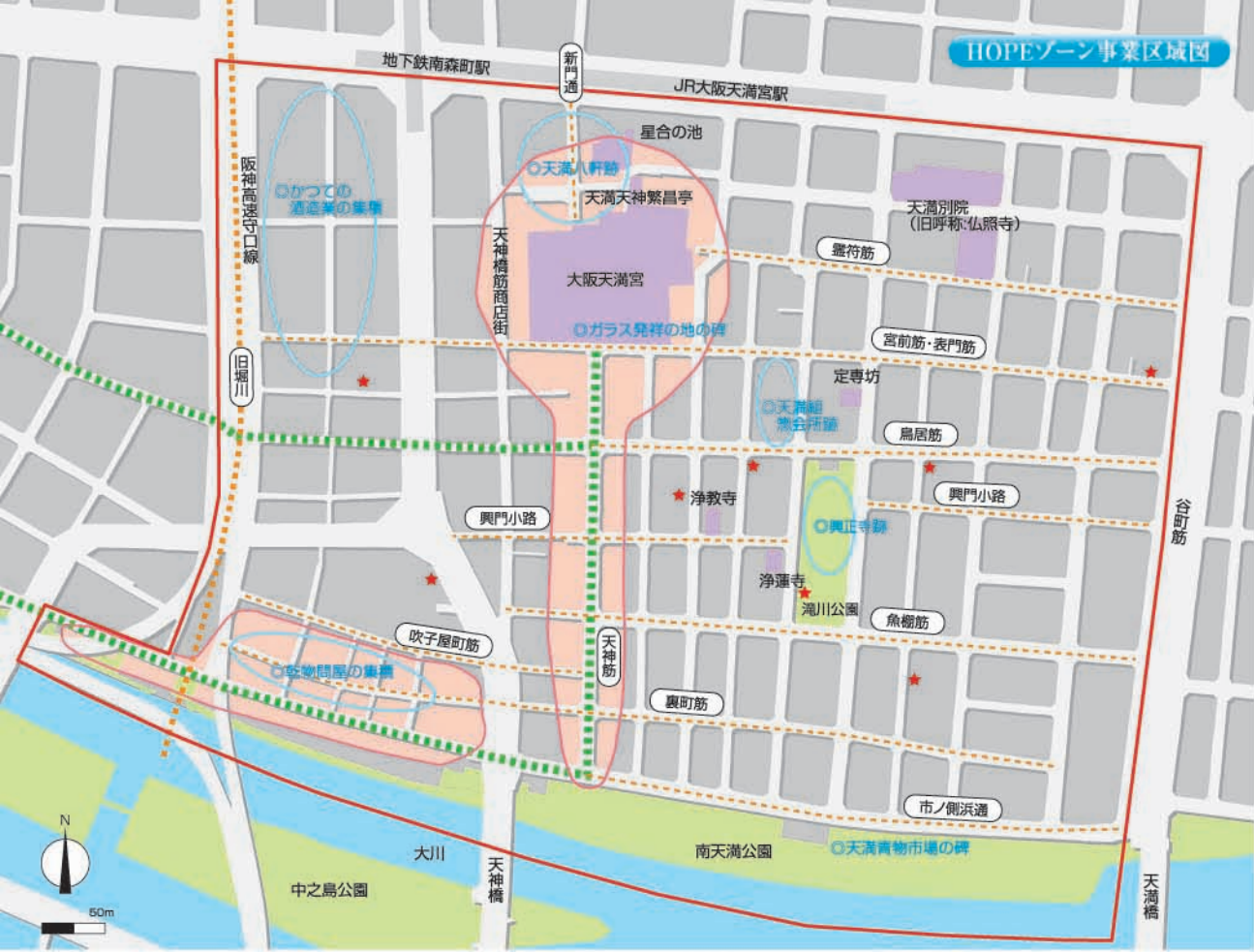
●旧町名や両側町の生活文化

江戸時代に天満組の惣会所が置かれ、町人が町政を担っていた天満のまちは、背割下水を境界として分かれる「両側町」で構成されていました。昭和53年の町名改正で旧町名はなくなりましたが、皆でお地蔵さんを大切にするなど昔ながらの生活文化とともに、町会や通りにその名前が受け継がれています。



●天満天神繁昌亭など北の大工門周辺のにぎわい

かつて「天満八軒」といわれた天満宮周辺のにぎわい。現在は、落語専用の常設寄席(よせ)である天満天神繁昌亭や星合の池など、北の大工門周辺を中心に、天神橋筋商店街のつながりのなかで、にぎわいがよみがえりつつあります。



HOPEゾーン事業区域 推奨エリア 社寺 地蔵・祠 公園 陸渡御ルート 旧跡など 歴史を伝える道筋など

※推奨エリアとは、事業区域全体の中でも重点的に取り組みを進めるエリアです

天満の歴史やまちなみの特徴を活かした天満地区HOPEゾーンのまちなみづくりのテーマは次のとおりです。

テーマ 天神さんから大川浜へ

「もてなし」のまちなみづくり

今も昔も、広い地域から多くの人々を迎え入れてきた天満。訪れる人に笑顔で声をかけ、まちなみの魅力を語る…その心は「もてなし」。古くから市や祭りでにぎわった川辺のまちなみの文化を大切に、祭りに彩りを添えることで、まちなみを「もてなしの場」にします。このテーマの実現に向けて、2つの方針「つなげる」「よそおう」に沿って取り組みを進めていきます。

よそおう つなげる

祭りや四季の「しつらい」でもてなす 「歴史的特徴」を活かしてもてなす

天満では、天神祭を中心に行われる四季折々の多彩な祭りにあわせて、「しつらい」によってまちなみに華を添える生活文化がありました。祭りや四季にあわせ、幔幕などのしつらいが映えるよう建物等を整え、もてなしの気持ちをもって「しつらい」を飾り付けます。

古くから、建物は周囲とのつながりを大切に建てられてきました。菅原町には、市内でも貴重な川沿い特有の町家や蔵がみられます。このような歴史的特徴を活かして、新たなまちと建物のつながりを育み、もてなしの場にふさわしいまちなみを整えます。

